

## 卒業式祝辞

2015年3月20日

辟雍会会長  
鷲山恭彦

「辟雍会」を代表してお祝いの挨拶を述べさせていただきます。

皆さんは、今、新しい人生のスタートラインに立っておられます。それぞれの仕事を通じて、どのように自己を実現し、どのように社会に貢献していくか、熱い思いにあふれておられることと思います。

皆さんが今抱えている、この志、抱負、夢は、決して忘れず、一生大切にしていきたいと思います。

あえてそう申し上げるのは、なかなかそうはいかない現実があるからです。

### 現実から学ぶ

こういう教師になりたい、会社でこういう仕事をしたいと思っても、現実には、教育委員会からはこうこうこういう教師像を求め、企業からはこういう人材をというように、否応なしにあるべき形を提示され、それに合わせることを求められます。

志と理想がある分だけ落差を感じて、大きな葛藤が生まれるでしょう。そうした中で、どうしても、自分の考え、思い、理想を優先して考えてしまいます。

ただ私は、皆さんくらいの年代の時に、心掛けたことがあります。それは、とにかく現実から学ぶこと、自分の思いを押しつけるのではなく、対象に即することでした。

本の世界も豊かですが、等身大の自分が実感する現実世界は、本の世界や自分の狭い世界よりも、遥かに豊かで、興味深いことに気が付いたからです。

虚心に対象から学ぶ、そこから初めて、生き生きとした現実の問題が見えて来ます。何をどうすればよいか、実際に判ってきます。

### 現実の中の自己形成

守・破・離という言葉が教えてもらったのもこの頃でした。まずあるスタイルを学ぶ。それをしっかり守って身に付ける。しかしいろいろな課題が生まれてくる、それを果たすために身につけたそのスタイルや枠組を破っていく、そしてその枠組から離れて自立していく、というプロセスです。守・破・離という学び方は、茶道、芸道、武道などに発しているようですが、こうした自己形成の仕方も、これから皆さんが力を蓄えていくために大切な態度でしょう。

現実に学ぶこうしたプロセスは、自分の思い描いていた、かくあるべき姿、夢や理想が、本当に通用するものなのか、常に検討のまな板にのせ、それを精練していく過程でもあり

ました。

またこのプロセスは、現実と繋がる様々なルートや媒介項をふやしていく過程でもありました。今まで関係ないと思っていたことが、自分の志と絡んでくる、繋がってくる、網の目ができてくる。それは人間関係だったり、隣接の学問領域だったり、いろいろでしたが、この結び目をたくさんつくっていくことが、目標実現の基盤になり、新しい飛躍のカギとなっていったことに、後で気が付いたものです。

志を貫き、かくありたいことを実現するには、こうした様々なプロセス、媒介項、手段、新しい学び、人との出会いなどが必要なのです。

### 一度、立ち止まる

これでよし、正しいと思ってやったのに、うまくいかないということは、多々あります。「正しい」という字は、「一」と「止」と書きますが、これは「一度、立ち止まることが大切だ」ということを意味しているのを知っているか、と教えてくれた人がいました。

成る程、自分の思い、自分の志を実現するには、一度立ち止まってみるのが大切なのだ。

一度立ち止まって、現実をもう一度を全面的に見直してみる、あるいは一度止まって、さらに現実との媒介項をつくって準備する、そして新たにアタックする。そういうしなやかな態度や姿勢が必要なのだということも、痛い経験から学びました。

物事は、決して直線的には進みません、必ずジグザクなコースをたどります。どうか皆さん、明日を信じて、自分の志や理想を、いろいろなプロセスを体験しつつ、悠々と実現していただきたいと思います。

### 憧れを

人間は、「憧れに憧れる存在だ」といわれます。小学校、中学校の時に、素晴らしい先生に出会った、その先生に憧れた、だから私もあのような先生になりたい、そう思って教師を志望した、という話をよくききます。私もそうでした。

その場合、私たちが憧れた先生は、実はその先生自身が憧れをもっておられた、志、理想をしっかり持つておられた、だから私たちは憧れた、ということに気が付きます。このように、人間は憧れに憧れる存在なのです。

このことから、志が、想いが、理念が、いかに大切か、よくわかると思います。今日の皆さんが胸に抱いている大いなる心意気を一生大切にしてください。

志をもち、かくありたいと思って生きる皆さんの魅力が、多くの人たちを惹きつけるのです。生きている魅力で人を惹きつける。そうありたいですね。そしてそれは、私たちの将来を、大きく言えば日本の未来を、更に豊かに照らしていくのだと思います。

### 組織と理念

今申し上げたことは、みなさん一人一人の生きる姿勢についてでした。将来、みなさん

は、組織をリードしていく立場に立たされていくようになると思います。志を持つ、理想を持つことは、組織においては、とりわけ大切なものになってきます。

今回、本学では、教養系がなくなり、支援系に縮小されました。私は辟雍会から大学を眺めて来たのですが、どうも改革理念がはっきりしなかったのではという印象をもっております。

教養系 25 年の歴史のなかで、卒業生は 1 万人近くおまして、評判もよく倍率も高い。こんな良い専攻を何故なくすのかという疑問は、辟雍会に沢山寄せられました。大学には大学のお考えがあるのだろう、私たちは大学を支えていく立場とっておりますので、何も申し上げませんが、私自身、25 年前の教養系の立ち上げに際しては、「欧米研究専攻」の創設に参画しましたし、その後の改革の中で「多言語多文化専攻」と「表現コミュニケーション専攻」の創設に尽力し、これらの専攻の社会的意義については今でも深い確信を持っております。辟雍会として教養系の卒業生の声も背負っている立場ですので、こういう言い方を許して頂きたいと思いますが、やはり大学の側で理念がはっきりしていなかったのではないか。理念がはっきりしない分、文部科学省もいろいろ言うことになったのではないか、という印象をもっております。

### 福井大学の経験

今、私は福井大学の経営協議会の委員をしております。福井大学にも教育学部があり、学芸大と同じ教養系があります。先生方は是非これを残したいと考えました。新課程や教養系という名前は使えませんか、学類にしよう、内容も新しくして、文理融合型の学類にしようか、地域国際の学類にしようかなど、いろいろ議論が重ねられました。

結局、国際地域学類として、文科省と交渉することになりました。その結果、文科省の方から、何と、学部にしたらどうか、という話になっております。今後どうなるか判りませんが、新しい展開です。

福井大学教育学部は、教職大学院などで先駆的な業績をあげていますが、文科省のいうようにしてきたからこうなった、というのでは決してありません。むしろ逆で、昨年、教授会の権限を骨抜きにして、学長に権限を集中する「学校教育法」の改正が行われた際には、教育学部の先生方は、問題点を指摘し、反対の声明を出しております。全国の大学で反対声明をだしたところは、文科省の顔色を伺って、ほとんどなかったのではないのでしょうか。

私たち経営協議会も、うかうかしておれません。国立大学への予算措置を減らす方向が出されていますので、これに反対して、「地方国立大学に対する予算の充実を求める声明」を、先月、出したところです。

やはり、組織というのは、きちっと理念を掲げて、衆知を集める、広く訴える。その方が新しい展望が開け、活性化していくと思います。

皆さんが組織を運営していく立場になった時には、まず理念をしっかり大切にさせていただきたいと思います。同時に、衆知を集めることに心掛けていただきたいと思います。

## 民主と集中のダイナミズム

これから皆さんが身を置く職場は、位階制のトップダウンの世界だと思えます。その中でも、グループを任されたり、集団をマネッジする立場になることは、これから多々あるでしょう。その際に大切なのは、民主主義的な力量だと思えます。合意形成を高いレベルで行う能力、と言い換えてもよいと思えます。

一人一人の意見を尊重する民主ということと、マネッジして一つの方向に集約していくということ、これは民主性と集中性とも言い換えられますが、この民主と集中のダイナミズムに、皆さん、習熟していただきたいと思えます。

民主と集中は対立しているようで、実は対立したものではありません。「最も強いリーダーシップは、最も徹底した民主主義と同一である」と申し上げたら、皆さん、成るほどその通りだ、と納得してくださると思えます。

もちろん現実にはなかなかそうはいきません。しかし、このダイナミズムを豊かに実行できる組織は、必ず発展していきます。

問題は、マネッジする側の力量の高さです。皆さんは、質の高いマネッジが出来るように、絶えず自分を高め、経験を積み、研鑽を重ねていくことが求められています。

## 扉の叩き方

もう一つ、大切なことがあります。今述べたのは、組織内のことですが、組織は、外部と交渉したり、競争したりするためのものですから、これから皆さんは、いろいろな外部の組織、団体の人たちと対応することになると思えます。

教育委員会の部局、相手の会社の各部局、地域のいろいろな組織、お客さんとの対応など、いろいろだと思えます。

この場合大切なことは、扉の叩き方です。そこに心の叩き方も入れたいのですが、まずはドアの叩き方を間違えないこと。それを間違えては、成る話もなくなります。

どこの扉をたたくと一番有効に事柄がうまく進んで行くのか。実務的なことはこの扉、理念的なことはこの扉、等々、この扉の叩き方に、習熟していただきたいと思えます。

自分で叩く扉を間違えていながら、その扉の相手を「分からず屋」と非難する人をよく見かけますが、これは自分の不明を恥じるべきで、情報をしっかり集め、相手をよく分析して、事にあたる努力が欠けているからです。

民主と集中のダイナミズムは、クラブ活動や自治会や生協の活動で身につけたかもしれませんが、それを是非、仕事の中で精錬していただきたいと思えます。扉の叩き方は大学ではなかなか学べないものです。この二つ、社会の中で、さまざまな試行錯誤を通じて習熟していただきたいと思えます。

理屈と論理の世の中のようにみえますが、大切なのは理屈ではなくて、社会的な勘なの

だと思います。ここがツボだ、と直感的に見抜く力、これは経験的に体得されることが多いですから、是非、失敗を恐れず、沢山の経験を積んで、この勘をしっかりと身につけていただきたいと思います。

こうした力は、いずれも皆さんの人間的力量と社会的力量に深く関わってくるものです。志を貫くためにも、こうした力量をじっくりと高めていただきたいと思います。

### 先輩たちとの交流を

同窓会の仕事をしておりますと、こういう素晴らしい力量を持っている皆さんの先輩たちと沢山お会いします。皆さんもこういう方たちと様々な交流していただきたいなと思います。辟雍会は、各県に支部をつくっておりますが、ここを通じて、みなさんにそういうチャンスが多く提供できればと思っています。

今、若い卒業生たちが中心になって、年に一回、大学に集まりたいね、ということで、新しい企画が始まっています。

5月23日の土曜日ですが3時から、生協の第一食堂で卒業生の集いを開催いたします。皆さんは卒業してすぐですから、なかなか難しいでしょうが、5月31日が本学の開学記念日ですので、その頃に、これから毎年開催できたらなあと思っております。

こうした友人との交流、先輩との交流、恩師の先生との交流など、辟雍会は出会いと交流の場として、皆さんの力になれるよう、さまざまな活動を展開いたしますので、是非ご参加をいただきたいと思います。

以上、辟雍会からの挨拶と致します。あらためて、ご卒業、おめでとうございます。